

Dudzinski, K. M. 2010.

Overlap between Information Gained from Complementary and Comparative Studies of Captive and Wild Dolphins

International Journal of Comparative Psychology 23: 566-586.

日本語タイトル

飼育下及び野生下のイルカの相補的研究・比較研究から得られた情報の重複

要旨日本語訳

イルカの行動は野生下、飼育下ともに何年にもわたって観察されてきた。飼育下、野生下の水棲哺乳類の比較は双方の場所で観察者が受ける制限があり、難しかった。未だにそれぞれの環境で行われる調査から得られる詳細は、他方の環境ではしばしば利用できないことがある。例えば、ある行動の発現に影響を与えるかもしれない体内の状態（例：ホルモン量）は野生のイルカでは簡単に測定できない。しかし、受診訓練動作 [husbandry behavior] 中は、定期的にそれらを記録することができる。反対に、イルカの移動パターンの詳細な記録は飼育下のイルカよりも野生下のイルカを長期間研究することで容易く得られる。移動パターンは飼育下の個体の研究に適用できないが、個体の行動や個体間の相互作用に関する洞察を得るためにプール内での動きのパターンを観察することは可能である。三つの飼育下、及び三つの野生下のイルカの研究対象集団における長期間の観察を比較しながら提示することで、それぞれの環境下での仕事がどのようにしてお互いを補い合うことができるかを示す。加えて、トレーナーの調査から得られたデータ（17回の完了した調査を含む50回の調査）から、イルカのトレーナーはいくつかの行動を野生イルカの観察と一貫した方法で解釈したことが示唆されている。例えば、テール・スラップ[tail slapping]は主に苛立ち（45.5%）や欲求不満（22.7%）として報告され、またそれだけでなく遊びの中で起こると述べられている（31.8%）。胸ビレでのラビングは性的な文脈（7.7%）や全く文脈がない場合（7.7%）よりも宥和（15.4%）、慰藉（7.7%）、愛情（26.9%）でよく使われた。顎を噛んで鳴らす[jaw clap]、ぶつかる、噛む、追い掛ける、激しく突く[ramming]といった行動は飼育下、野生下ともに攻撃的な文脈で観察される。より重要なのは、調査されたトレーナーの報告に、野生下と飼育下のイルカの間で、首尾一貫した違いがなかったことだ。著者が行なった調査プログラムは、イルカのコミュニケーションや社会のより完全な理解を促すために、双方の環境の利点を融合させている。

訳者：中筋あかね 翻訳日：2012年5月18日

※日本語要旨は第一著者の承諾の元に作成しました。訳者が第一著者と同一でない場合、訳文に責任は持たませんので、正確な情報が入り用の方は、原文をご覧ください。